

侵略

私の戦争体験記

従軍兵士の証言

日本中国友好協会・中国帰還者連絡会／編

日本青年出版社

私の戦争体験記

侵略 — 従軍兵士の証言

日本中国友好協会・中国帰還者連絡会／編

私の戦争体験記 侵略 - 従軍兵士の証言

1970年9月30日 発行

定価 560円

編 者 日本中国友好協会
中国帰還者連絡会

発 行 日本青年出版社

発行所 日本青年出版社

東京都渋谷区代々木5丁目37番15
電話 東京(03)(469)1387
振替 東京 78932

はじめに――再びあやまちをくり返さないために

中国帰還者連絡会

中国帰還者連絡会の会員は、一部を除き、戦犯抑留を解除され帰国したが、その翌昭和三十三年春、なぜ戦犯として抑留されるようになったか、その犯罪事実をあばいた手記を書き、「三光」と題し出版した。この本は多くの人びとから熱烈な反響をよび起こした。しかし、一部勢力の妨害を受けて初版だけで絶版となり、三三年夏、新読書社から「侵略」という題で新しく出版された。

今年になって会は、日中友好協会の創立二〇周年記念出版の一つとして「侵略」の姉妹編を出すことでこの計画への参加を求められた。私たちは、出版活動が会の経常的活動の一つであり、また最近の内外情勢からみて、日本軍国主義の罪悪を暴露し、その復活に反対することは会本来の使命であることを確認し、「侵略」に出さなかった旧手記の一部と帰国後の生活、運動をつらじて得た体験、それにもとづく過去の批判などをもってこの計画に参加することにした。

最近になって「侵略」を読んだ若い人たちの間から「ありふれた普通の人間」がどうしてこのような凶悪な罪行を犯すようになったのか? という疑問がしばしばかかれるようになった。

私たちはこの出版を機会に自分の体験を整理し、この問題を私たちなりに考えてみたいと思う。まず第一に考えなければならないのは、私たちの育った環境と、なによりも受けてきた教育のことであろうと思う。

明治二三年、戦前の教育基本法ともいえるべき教育勅語が發布された。要するに、教育の目的は、

天皇は國家の命令に従順で一朝事あるときは、身命をなげうって、國のためにつくす忠君愛國の國民を養成することである、とこの教育勅語ではうたわれている。

私たちは、この教育勅語のもとに、國民の末端にまでおよんだ軍、官僚警察機構にしばらく成長した。そこでは國民はひとりの人間としてではなく徴兵、納税、教育の三大義務を課せられた忠良なる臣民としてしか存在できず、この体制に反対することは不忠不孝の非國民となることであり、それは家族はもとより、村や町の不名誉なこととされた。

日清、日露の兩戦争の勝利は、日本人は優秀民族であるという自尊心を生み、逆にアジア民族べつ視の風潮をつくりあげた。

そして昭和六年、軍部と結託した一部独占資本は、滿州事変をひきおこし、滿州を占領した。こうして、政府は、準戦時体制、すなわち教育勅語の「一旦緩急あれば義勇公に奉ずる」時機の到来を宣言し、國家總動員体制に入ってしまったのである。

私たちはこのような状況のなかで、アジア諸民族に対するあやまった優越感をもつ「忠良なる臣民」として徴兵または召集を受けて軍人、軍属となり、ある者は日本の「生命線滿州國」の官吏となったのである。これらの状況は本書の「印鑑」「手」などの手記に描かれている。

このような思想を基盤にしつつ戦場に出ていったのであるが、その戦場では、上官の命令にもとづき否応なく血の洗礼をうけていった。これが第二の問題である。

侵略地においては、一般の住民も敵の片割れと見える。敵を殺さねば、自分が殺される。このせっぱつまった状況で「敵」を殺した瞬間、兵隊は本来の意味の人間であることをやめる。そして、一般住民に「敵性住民」のレッテルをはって集団殺りくが行われる。そこに民族べつ視の思想が働き、「犯罪行為」という概念はうずれていった。日本軍で行なわれていた「試し斬り」「実的刺突」

は初めて戦場に臨む見習士官と初年兵を強制的にこうした状況におさしこめる「教育」であった。こうして戦時国際法にも違反する犯罪行為を次つぎとつみ重ねていった。

第一部後半から第二部にかけてこれらの体験がまとめられている。

私たちはこの犯したあやまちのなから次のようなことを考える必要があると思う。

それは、侵略戦争につながるすべての政治を絶対に許さずその芽を未然につみとっていかねばならないということである。侵略戦争の中で人間であることはできないからである。

そしてまた、侵略を許す思想的基盤、とりわけ教育の果たした役割を考え、教育を平和を求めるすべての国民のものとしていかなければならないことである。無批判で従順な「善良なる市民」ではなく、真実を見抜く力と主体性をもった人民として生き、人間を差別視し、民族をべっ視する思想の復活を許さないことが、二度とあやまちをくりかえさない私たちの使命だと思っている。

戦後二五年、私たちのまわりには、「昭和元祿」といわれる大平ムードとはうらはらに強烈な戦前への郷愁がにじみ出ている。

東京教育大学の家永三郎さんは教科書検定の不当を訴え第一審で勝ったが、文部大臣はこの判決を無視すると宣言した。このように外壕を埋められるのを黙っていることは「奴隸化」への、つまり人間を失格する第一歩である。私たちは自分の体験から省みて、そのような姿勢を絶えず批判し、自ら戒めることが再びあやまちをくりかえさない上に一番大切なことだと思っている。

ここに集めた私たちの手記は、内容は残酷、表現は稚拙であるが、私たちの犯したあやまちを若い人たちがくりかえさないように少しでも警笛の役割を果たしてくれたら幸いだと思っている。

なお、手記中の事件は全て事実であるが、諸般の状況を考え登場人物の名前は一部仮名とした。

一九七〇年八月一日

目次

はじめに――再びあやまちをくり返さないために……………中国帰還者連絡会……………1

第一部 侵略戦争にかりだされて……………7

* おふくろ……………8

* 印鑑……………14

* 生きた人間を標的に――刺突訓練……………37

* 焼くな、犯すな、殺すな――「三光」……………52

第二部 血ぬられた侵略の足跡……………65

* 自分の呼吸をかぞえるように……………66

* 私は生きた人間の解剖で教育された……………74

第三部 侵略戦争と人間性

* 血でそめた靈固披山麓	85
* 毒ガス弾作戦に参加して	102
* 人類に背いて―恐るべき細菌爆弾	122
* 無住地帯	149
* 香港占領地総督部	163

* 傷跡	174
* トランク	181
* 勝君のお母さんへ	197
* 暁に祈る	207
* 手	232

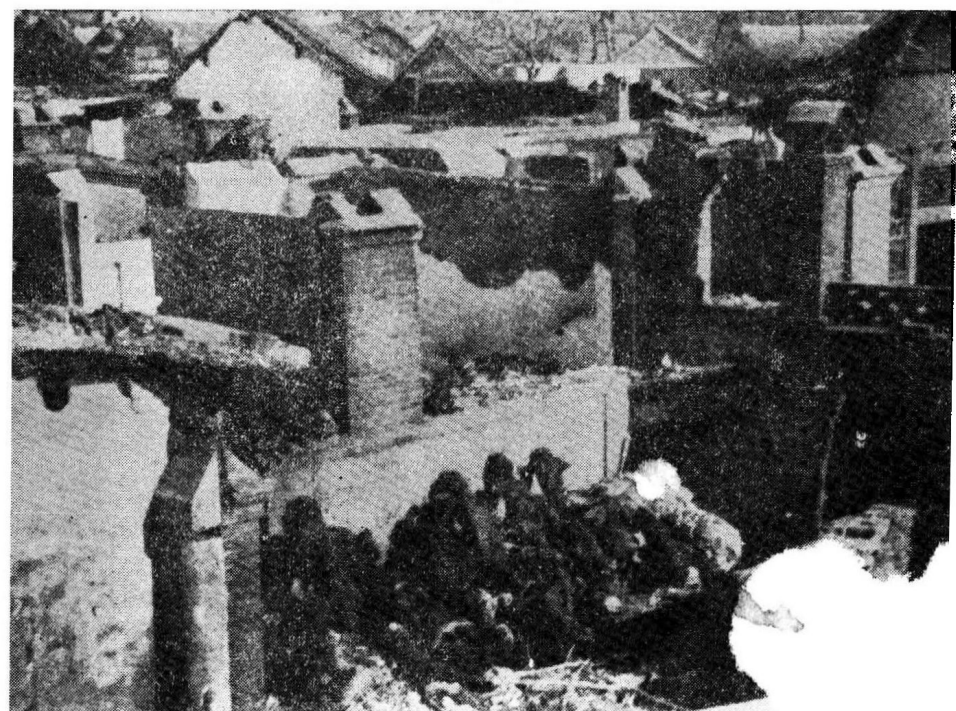
青年たちへ―侵略戦争の体験から

柳田謙十郎 256

第一部

侵略戦争に

かりだされて



おふくろ

齊藤 常三

おふくろは可愛想だ

おふくろは水呑百姓の女だ

思えば思うほど

おふくろを樂にしてやりたい

人間らしい暮しをさせたい

おふくろは顔が黒く背が低い

だけど手が大きくて力がある

悲しい時も嬉しい時も

俺を抱きしめ 俺のために生きてきた

山に行つては木の実を取つて来てくれた

自分が喰わなくとも

キット何か持つて来てくれた

何もない時は

ユゲ飯でムスビを作つてくれた
腹違いの兄は

いつもいい着物を着て学校へ行く

だけど俺はそのお下りを着る

遊びたいけれど 俺は遊べない

牛の世話、飯炊き、縄ない

俺の仕事は一杯あつた

「ヤーイヤーイ、ボロを着た常公！」

俺はみんなにからかわれ

とうとうドモリになつた

俺は仏壇のまんじゅうを

ソーッと一つ喰つた たつた一つ取つた

オババは俺の尻をピシヤピシヤ叩いた

そして俺を真暗な物置に投げ込んだ

俺はギャアギャアと泣いた

「おっかあ おっかあ」

夢中で戸を叩き おふくろを呼んだ

やっと外が真暗になって

おふくろが助けに来た

おふくろは俺を抱きしめて

俺はおふくろにしがみつき

嬉しくて嬉しくてワンワン泣いた

おふくろはガサガサな冷い手で

俺の涙をふきとってくれた

倒れかかった草屋根 真黒な天井

何十年も燃し、たまったスス

その下に暗いランプが一つ

おふくろは働いて、生きている

働いた、働いた、

だけどオババには気に入らない

オババの目は鷹の目

おふくろはうなだれてすみっこにいる

オトはいろりに頭をたらし

火箸で灰をかきまわしている

オトは今年は「早稲」が良いと言った

オババは「オクが良い」と言った

おふくろは「早稲が良い」と言った

オババは額にシワを寄せて

真赤に焼いた火箸をおふくろに叩きつけた

「飯ばァ喰って、オオチャク者出て行け！」

おふくろは家を出た

真暗な山道を俺の手を引いて、おふくろは山

の神さんの前に座って、拜んだ

俺も拜んだ

二里も歩いて実家に帰った

オトは人様に笑われないように

おふくろを連れて夜中に帰った

一回、二回、三回、四回目

もう行く処ところがなくなった

実家は借金で家は人手に渡ってしまった

おふくろの親は巡査に連れられて行った

そしてもう帰って来なかった。

一人ポッチになったおふくろ

おふくろの顔はドンドン変って行く

おふくろの顔に傷跡きずあとが二つ 手に火傷やけどの跡

だけど だけど

おふくろは俺を可愛がってくれた

オババは俺を丁稚ていぢに出した

おふくろは「他人の飯にア骨がある がまん

して 早う一人前になって店をもて」と

巾着きんちやくの底から五〇錢銀貨を二つくれた

その手は垢切あかぎれだらけで

血が流れていた

だけどおふくろは涙ぐんで

「元気で」と手を振って送ってくれた

初めて見る東京

東京 目がまわる

俺は恐しくて歩けなかった

学帽にカスリの着物を着た俺

みんな いやな目つきで見えて行く

俺はクリーニング屋クリーニングに勤つとめた

旦那だんなとおかみさんは

俺を小僧こぞうと呼んだ

小守、飯灸めし灸、洗濯せんたく

そして小間使いと注文取り

どんなことでも「ハイ」

その外ほかに何も言えない俺だった

印裨しんぱん天を着て、半ズボンに地下足袋じかたび

自転車に大きな籠かごをつけて

お得意まわりをした

ある日 路地ろじに自転車置いて

臼井のお屋敷やしきに入って行った時だった

帰って見たら洋服が一着ない

「泥棒！ 泥棒！」

俺は叫んだ！

誰も知らん顔して通って行く

俺の涙がポタポタと足もとの小石を濡らした

真暗になるのを待って、俺は帰った

且那の前で 俺はドモッて やっと言った

「ヨ、ヨ、洋服を盗まれた」

「馬鹿野郎！」

「売りとばしたんだろう、言え、本当のこと

を」 且那はゲンコツで俺の頭をなぐり

背中をどづいた

違う違う 俺は泣いて 謝った

横から且那の子供まで 口真似をして

俺を馬鹿にした

夜、床の中で泣いた

枕をびっしょり濡らして

「おっかあ 助けて」と 俺は泣いた

夜中に柳行李をしょって

俺は逃げ出した

巡査に捕らないうちに、夢中にあてどもなく

歩いた

上野公園のベンチで 一夜を明かした

家に帰りたい だけど

近所の人に オババに おふくろが馬鹿にさ

れる

三日新聞配達 二日牛乳配達をした

勤める所をさがした

上野図書館、藤倉電線工場と職はあった

だが学歴のない俺は

誰も使ってくれない

俺は運送店に入った

朝早くから 夜は一二時まで

雨の日も 雪の日も 汽車は休まない

俺も休めない

俺のオトのような

おふくろのような人が大勢いた

俺は みんなと 荷物をかついだ

「ウントコリヤ ドッコイコリヤノヤ

オイラの旦那は、けちくそだ」と

かけ声かけて どんどんかついだ

俺は働いた 働いて金をためた

その金で 垢切れの膏藥こうやくを買って

おふくろに送った。

二三になった俺

おふくろは ホット一息ひといきする時

戦争は俺をひっぱり出した

俺は戦争に出た

村の人は 軍国の母、營いさの家と言った

俺は喜んだ 親孝行ができる

天皇のために死んでも忠義を尽すんだ：

だがおふくろは言った

「体に気をつけてなア

無茶な真似まねをするでないぞ

死なないで元気で帰っておくれ」と

そしてソツと千人針まんりとお守を

俺の手ににぎらせた

遠い遠い、中国に來た

三八銃と劍が俺の体よりも大切なものとなっ

た

その銃と劍で 俺は中国の百姓を殺した

真黒な顔をして ボロボロな着物を着て

畑を耕すオトのような人

手に垢切れをしておふくろのような働く人を

俺は殺した

倒れかけた草屋根の家もみんな焼まくった

戦争は終わった 倒れかかった草屋根の下で

真黒にススのたまった天井の下で

七〇になったおふくろが

垢切れから血を流し

生きるために 必死で働いている

戦争は嫌だ！

働く者同士を殺し合うのは嫌だ

もう俺はだまされない

苦しみ通してきたおふくろのため

おふくろの苦しんできた嫌なくらしを

二度と子供に与えたくない

戦争のない世の中を

みんなが平和に暮せる世の中を

働く者同士 もう殺し合わないように

おふくろがもう苦しまなくてもよいように

キット キット

俺のこの腕で 作り上げねばならないのだ

印鑑

入戸野 梅男

(一)

富士を背にして甲府から北に三〇キロメートル、ここは非常に地形が高く、付近の人びとは天王原といっていた。とくに年寄りには誰がいついいたか知らないが「御天子様のくださったありがたい里だ」などといっていた。従って他の村より高い税金がかけられ、また毎年秋に五穀納めといつて、米、麦、粟などを取り上げられていたが、何もいうことはできなかった。

ここは現在、朝神村といつて全戸数が六〇〇戸余りあり、その半分以上が小作をやつて、村の六人ほどの地主から田畑を借りていた。この村のすべては、これらの地主が支配しており、村長は毎期、かれらが交代にやり、また村会議員にしても、地主の縁故関係の者が出ていて、一般の農民は口一つ出すことができなかった。この朝神村といえ、県下でも貧乏村の代名詞であつた。

この村で一番大きな部落は浅尾という部落で、全戸数は約一二〇戸ほどあり、そのうち約七〇戸ぐらいは小作で、これらの小作はほとんど篠原という地主の田を耕し、そのかたわら養蚕をやり、また大根を多く作っていた。浅尾大根といえ、県下でもその名が高く、誰でも町に行くと二割も